

仙台空港

滑走路かさ上げ45センチ

検討委 復旧・復興計画を策定

東日本大震災で被災した仙台空港の整備の在り方を検討してきた有識者らによる委員会は1日、津波の浸水対策として滑走路を最大45センチかさ上げすることなどを盛り込んだ同空港復旧・復興計画を策定した。

滑走路のかさ上げは、昨年9月の素案で示された最大1・1倍より低くなつた。震災と同規模の津波を想定し、既設の海岸堤防(7・2メートル)に名取、岩沼両市が内陸側で設置を検討する堤防の効果を加味してシミュレーションした結果、45センチも6時間後には離着陸が可能になつたという。

津波で滑走路内に自動車などが流入し、除去に時間を要した教訓を踏まえ、漂流物対策も提案。空港敷地東側に長さ3キ、高さ1〜5メートルのフェンスを造る。津波襲来時に空港内の航空機を退避させる駐機場(エプロン)の整備も盛り込んだ。

委員会は事務局の東北地方整備局は、滑走路のかさ上げと漂流物対策フェンス設置に3年、退避エプロンに1年の工事期間を見込んだ。事業費は「着手するかどうか不明」として算定しなかった。

委員長の奥村誠東北大東北アジア研究センター教授は「ハード面での空港の津波対策を具体的に検討できる基礎ができた意味は大きい」と話した。

国土交通省は3月末をめどに、仙台空港を含めた全国6空港の避難計画をまとめる方針。避難などのソフト対策を踏まえ、委員会がまとめたハード対策を検討する。